

“that = あれ”の再考

相手の発言に対して、「それはよかったね」や「それはめずらしいね」と返答する場合の「それ」には、it ではなく that を用いて、

That's good. / That is unusual.

のようにします。

thatは日本人にとって一番厄介な単語

です。that の働きは、

1. 指示代名詞（上にあげた例）
2. 名詞節を作る接続詞
3. 名詞節を導いての同格の that
4. 形容詞節を導く関係代名詞
5. 先行詞の前に置く that (☞第93話)
6. 比較の文の中の that = “the 名詞”

とさまざまです。

このように that は、一見、いろいろな働きをするかのように見えますが、that はあくまで that です。理解を妨げているのは、

“that = 「あれ」” という図式です。

そこで、「あ」→「そ」として、

that = 「それ」

としてみましよう。

that は「それ」の検証

I think *that* he is ... の文の that は、後に SV を従えて名詞節を作る接続詞です。初心者はこれを、(×)「私は思う。あの彼…」というふうに読み間違えます。

動詞 (= think) の後の that は名詞節の始まり

を示し、SVO (第3文型) の英文を作る、という知識は必要ですが、「私は思う」+「それ (= that) は…ということ」とすれば、「あれ」と訳すよりは理解しやすいはずですが、

“同格の that” と呼ばれる接続詞の that があります。

the fact *that* he is innocent (彼が無実である、という事実)

といった例で、that は「という」と訳します。この場合でも、“that = 「それ」” で、

「事実 (= the fact)」+「それ (that) は…ということ」

とすれば、何とか理解できます。

また、

the fact *that* attracts me (私を引きつける事実)

の that は関係代名詞ですが、

「事実」+「それは (= that) 私を引きつける」

とすれば、やはりわかります。

以上、いずれの例でも、“that = 「あれ」” という思いこみが